二〇二三年度

入学試験（二次）問題

国語

・答えはすべて解答用紙に書きなさい。
・ぬき出し問題や記述問題では、句読点や記号も一字と数えること。

横須賀学院中学校

一

次の――部について、漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直しなさい。

1 風上に立つ。
2 閣議で決定する。
3 郷里に帰る。
4 簡潔に説明する。
5 病気をナオす。
6 目的をタッセイする。
7 時間をハカる。
8 身をコにして働く。

二

慣用句について、次の問いに答えなさい。

(1) 次の1～5の（　）にあてはまる語を次の中からそれぞれ選び、慣用句を完成させなさい（同じ記号を二回使ってはいけません）。

1（　　）を失う。
2（　　）を売る。
3（　　）をひそめる。
4（　　）を洗う。
5（　　）をにごす。

ア、言葉　イ、足
ウ、色　エ、顔
オ、影（かげ）　カ、油
キ、声

(2) (1)の慣用句1～5の意味を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい（同じ記号を二回使ってはいけません）。

ア、心配やおそれなどで、顔が青ざめること。
イ、表だったところから、姿をかくすこと。
ウ、むだな話などで時間をつぶしてなまけること。
エ、悪いことをきっぱりやめること。
オ、はっきり言わず、あいまいにすること。

三　次のア～エの文を並びかえて、筋の通る文章にし、順番を記号で答えなさい。

ア、もし、うそがばれてしまうと、周りの人たちからの信用を失ってしまいます。

イ、どうしてうそをついてはいけないのだろう、と思ったことはありませんか。

ウ、すると、いつか自分のことを信じてくれる人がいなくなってしまうのです。

エ、おそらくだれもが一度は思ったことがあるでしょう。

四 次の会話文を読んで、後の問いに答えなさい。ペネトレとは、三年前からぼくの家にすみつくようになった、人間の言葉を話す変わった猫（ねこ）です。

ぼく…ある言葉をまちがった意味でつかう人のほうが圧倒的な多数派になっちゃって、まちがった意味のほうが世の中で通用するようになったらどうなるの？　そのときは、それが正しい、ほんとうの意味になるんじゃないの？

ペネトレ…「情けは人のためならず」って言葉、知ってる？

ぼく…知ってるよ。情けをかけることは、その人のためにならないってことでしょ？

ペネトレ…ちがうよ。ほんとうは「人に情けをかけてやること、つまり同情して助けてやることは、結局は自分のためになる（から、情けをかけてやるべきだ）」っていう意味なんだよ。でも、いまでは「人に情けをかけてやること、つまり同情して助けてやることは、結局はその人のためにならない（から、情けをかけてはならない）」って意味だと思ってつかっている人のほうが多いみたいだ。つまり、ほんとうの意味は［1］を根拠（こんきょ）にして人に同情することをすすめるものなんだけど、通用している意味は、［2］を根拠にしてひとに同情しないことをすすめるものなんだよ。

ぼく…ずるがしこいほうの意味がほんとうの意味なのか？

ペネトレ…そうなんだけど、そんなずるがしこい意味のことを、わざわざひとまえで言わなきゃならないことなんてあんまりないだろ？　むしろ、ほんとうは利己主義が原因でひとを助けたくないときに、そのいいわけとして「同情して助けてやることはその人のためにならないんだ」って意味のことを、ひとまえでは言いたくなるんじゃないかな？　つまり意味が変わってきたのは、そういう必要のほうが多かったからなんだ。意味が変わるのにも根拠はあるんだよ。圧倒的な多数派に支持されたから正しい意味になったんじゃなくて、[3]それが必要だったから圧倒的な多数派に支持されるようになったはずなんだよ。もっとも、そのこと自体が、圧倒的な多数派の支持があったあとで、はじめてわかることなんだけどね。

（永井均「子どものための哲学対話」より。ただし一部改変があります。）

問一　[1]、[2]にあてはまる語句として適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア、ひとのためという利他主義
イ、ひとのためという利己主義
ウ、自分のためという利他主義
エ、自分のためという利己主義

問二　――3「それ」は何を指していますか。「～こと。」に続くかたちで、文章中から五字以上十字以内でぬき出しなさい。

五 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

本を読んでいると、「どうしてこんなことが書いてあるのだろう？」と疑問に思う部分が多々ある。どんなに好きな作家でも、所詮[*1]はアカの他人が書いているのだから、当然である。読みながら、納得できないと感じたり、こう書いたほうがいいんじゃないかと自分なりに考えてみたりすることもあるだろう。自分が作家であったならとシミュレート[*2]してみることは、[1]スロー・リーディングの楽しみの一つである。

とにかく、大切なのは、立ち止まって、「どうして？」と考えてみることだ。本というのは、そういった疑問を持った瞬間に、そういう疑問を持った人にだけ、こっそりとその秘密を語り始めるものなのだ。疑問を持ったら、素通りせず、虚心[*3]にその一節に耳を傾けてみよう。A、そのときには理解できなくても、そうして気にかけることで、その一節は読後も記憶に残り続け、何年か経ってから、「ああ、ずっと不思議だったけど、あれはそういうことだったのか！」と理解できるときが訪れるものである。そのとき初めて、[2]長い時間をかけて、作者の最も深い場所から発せられた声は、読者に届くのである。

B、カフカや安部公房の小説などを読んでいると、奇妙な設定や言動に次々と出くわすことになる。しかし、彼らの作品を単に「ワケワカンナイ」と投げ捨ててしまえば、自分で自分を「[3]馬の耳に念仏」状態にしてしまうことになる。確かにそれらの作品は難解だが、そこから、長い歴史の中で多くの人が得てきた豊かな内容を、ほんの少しでも自分も得たいと考えるならば、まずはゆっくりと時間を取って、「なぜ、わざわざ、作者はこんな書き方をしているのだろう？」と考えるところから始めなければならない。それは、新書[*4]やビジネス書[*5]のように、今日、明日役に立つことは教えてはくれないかもしれないが、自分自身の価値観を大きく揺さぶるような経験をもたらしてくれるかもしれないのである。

謎解きというのは、推理小説の中で、作者が敷いたレールに沿ってだけするものではない。良書には、どんなものにでも謎はある。それを解く術は、個々の読者が自分自身で発見しなければならない。

常に「なぜ？」という疑問を持ちながら読むこと。これは、[4]深みのある読書体験をするための一番の方法である。そして、読者が本を選ぶように、[5]本もまた、読者を選ぶのである。会話の中で、聴く気のない相手に対して、人が「この人に話しても仕方がない」と

そっぽを向いてしまうように、[6]なぜ？　という疑問を持たない人には、本は永遠に口を閉ざしてしまうだろう。

最近の研究で、人間の脳の短期的な情報処理能力について多くのことが分かってきている。[*6]パソコンの一次キャッシュに当たるようなこの領域は、人間の脳の場合「ワーキングメモリ」と呼ばれていて、その容量は私たちが想像していた以上に小さいようだ。

人間の「ワーキングメモリ」は少しずつしか情報処理ができないから、本を読むときに、速読で大量に情報をインプットしようとしても、そもそも無理がある。スロー・リーディングによって、小分けにして、その都度長期記憶との間を往復しながら情報を処理していかないと、理解は進まないのである。

これほど小さなメモリを使って本を読んでいる以上、少し前に読んだことを忘れてしまうのは、不思議なことではない。[C]、一回読んだだけで、すべて覚えているほうが異常である。私たちには、いつもどこか、「天才願望」があって、速読本は、そこに巧[*7]みにつけ込み、「やればできる！」的な暗示的表現をこれでもかとたたみかけてくるが、クールな大人は、そんな謳い文句にコロッとやられないことにこそ胸を張るべきだ。

外国文学の長編小説などを読んでいると、登場人物の名前や特徴なども、つい忘れてしまう。私の『葬送』という小説についてもよくそう言われたが、その都度前のページに戻れば、それでいいのである。もちろん私も、ドストエフスキーの名前のややこしい登場人物が大勢出てくるような小説を読むときには、しょっちゅうページをさかのぼって、「なんだったっけ？」と確認し直している。

スラスラとよどみなく読めるのが当たり前と言われると、なんとなく、そうしてページを元に戻るのも屈辱的[7]だが、そもそも[8]人間の頭の構造からして、それが当然だと分かってしまえば、気楽にページのあちこちを[9]右（　）左（　）しながら本を読めるようになるものである。逆に、一切、そんな必要がないという人がいれば、「本当かな？」と、少し意地悪く疑ってみよう。

分からなくなった箇所をそのままにしておいて、読み進めていっても、内容の理解は半減してしまう。忘れた部分は、「なんだったっけ？」としっかり確認してから、改めて前進すればいいのである。

～中略～

[*8]そうしたことを通じて、私は読書の喜びを知り、自分の好き嫌いを知った。[D]、それ以上に学んだことは、ある作家のある一つの作品の背後には、さらに途方もなく広大な[E]の世界が広がっているという事実である。どの一つの連鎖[*9]が欠落していても、

その作品は生まれてこなかったかもしれない。言葉というものは、地球規模の非常に大きな知の球体であり、そのほんの小さな一点に光を当てたものが一冊の本という存在ではないかと思う。一つの作品を支えているのは、それまでの文学や哲学、宗教、歴史などの膨大な言葉の積み重ねである。そう考えるとき、私たちは、本を「先へ」と早足で読み進めていくというのではなく、「奥へ」とより深く読み込んでいくというふうに発想を転換できるのではないだろうか？

作者は一体、何を言おうとしているのだろうか？　そしてその主張は、どんなところから来ているのだろうか？　それを探るのは、常に、奥へ、奥へと言葉の森を分け入っていくイメージである。

一冊の本をじっくりと時間をかけて読めば、実は、一〇冊分、二〇冊分の本を読んだのと同じ手応えが得られる。これは比喩でも何でもない。実際に、その本が生まれるには、一〇冊、二〇冊分の本の存在が欠かせなかったからであり、私たちは、スロー・リーディングを通じて、それらの存在へと開かれることとなるのである。

（平野啓一郎「本の読み方　スロー・リーディングの実践」より。ただし一部改変があります。）

＊1　所詮……つまるところ、結局。
＊2　シミュレートして……試して。
＊3　虚心……素直。
＊4　新書……新書版（105×173mm）の本。様々な専門分野の入門書のようなものが多い。
＊5　ビジネス書……仕事の知識や考え方、情報などが得られる本。
＊6　パソコンの一次キャッシュ……コンピューターで使用頻度の高いデータを一時的に保存するところ。高速処理できるが容量は小さい。
＊7　巧みに……うまく、上手に。
＊8　そうしたこと……「中略」部分の内容を指している。筆者は三島由紀夫の『金閣寺』に「なんだこりゃ？」的衝撃を受け、三島の本や三島が影響を受けた本を読みあさった。その後もう一度『金閣寺』をはじめとした三島の作品を読み返すと、はるかによく内容が分かりうれしかったということ。
＊9　連鎖……結びつき、つながり。

問一 A ～ D にあてはまる語を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい（同じ記号を二回使ってはいけません）。

ア、たとえば　イ、しかし　ウ、むしろ　エ、たとえ

問二 ――1「スロー・リーディング」の対義語を文章中から二字でぬき出して答えなさい。

問三 ――2「長い時間をかけて」は、どの語句にかかっていきますか。次の中から選び、記号で答えなさい。

ア、深い場所から　イ、発せられた

ウ、読者に　エ、届くのである

問四 ――3「馬の耳に念仏」とありますが、ここで「念仏」にあたるものは何ですか。次の中から選び、記号で答えなさい。

ア、多くの謎（なぞ）に包まれていること

イ、すべてを理解している神のような存在

ウ、今すぐ役に立つ情報

エ、人類がこれまでに得てきた豊かな内容

問五 ――4「深みのある読書体験」とは、どのような体験のことですか。文章中から二十字以上二十五字以内でぬき出し、その最初と最後の三字を答えなさい。

問六 ――5「本もまた、読者を選ぶのである」と同じ内容が書かれている一文を、これより前の文章中からぬき出し、その最初の五字を答えなさい。

問七 ――6「なぜ？　という疑問を持たない人には、本は永遠に口を閉ざしてしまうだろう」の中で使われている技法を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア、擬態語（ぎたい）　イ、倒置法　ウ、擬人法（ぎじん）　エ、反復

問八 ――7「屈辱的」のここでの意味として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア、イライラさせられること

イ、はずかしめられること

ウ、ばかにされること

エ、めんどうをかけられること

問九　――8「人間の頭の構造」とありますが、これは人間の頭脳にどのような特徴があるということですか。「～という特徴」に続くかたちで、文章中から十字以上十五字以内でぬき出し、その最初と最後の三字を答えなさい。

問十　――9「右（　）左（　）」の（　）には同じ漢字一字が入ります。その漢字を答えなさい。

問十一　E にあてはまる語を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア、希望　イ、言葉　ウ、幻想　エ、感覚

問十二　――10「一冊の本をじっくりと時間をかけて読めば、実は、一〇冊分、二〇冊分の本を読んだのと同じ手応えが得られる」とありますが、それはなぜですか。その理由にあたる箇所を文章中から三十字以上三十五字以内でぬき出し、その最初と最後の三字を答えなさい。

問十三　次の中から本文の内容と合っているものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア、本は読んでいて疑問を持ったらすぐに人に聞くなどしてその場で内容を理解していかないと、良書から見捨てられることになってしまうので、誠実な対応が必要だ。

イ、本はそもそも今の自分に合ったものを選ばないと、疑問ばかりで何も得られないことになってしまうので、読書する前にゆっくり時間をかけて選ぶことが大切だ。

ウ、本は読んで分からないと思うことがあったらさかのぼって確認したり、疑問を持ち続けたりすることが大切で、長い時間をかけて理解していくものだ。

エ、本はまず一回素早く読み終え、その後でゆっくり分からなかった部分を調べなおして読むという方法をとることで、人類の知の積み重ねを自分のものにすることができるのだ。

六　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中学校駅伝のブロック大会当日。上位六校が県大会に進出できる試合だ。桝井（おれ）は市野中学三年、陸上部部長。昨年まで強力に指導してくれていた満田先生が他校に異動となり、今年は二十代後半の頼りない女の先生、上原が顧問（担当の先生）となっている。

桝井は駅伝メンバーを陸上部以外からも集め、一生懸命力をつくし今日までチームを引っ張ってきた。走順も桝井が決め、最近体調がすぐれず調子の出ない自分は5区、上り調子の二年の俊介を6区（アンカー・最終走者）にしていたのだが、当日の朝、上原が俊介を5区、桝井を6区に変更した。

今のおれに俊介みたいな走りはできない。だけど、俊介みたいにひたむきに走ることはできるはずだ。

「身体を跳ねさせるな」「しっかり息を吐いて」「腕を大きく振れ」おれは俊介にかけていた言葉を、自分に向けた。そして、忠実に自分に応えようと、身体を動かした。

幾多西中の気配は後ろから消えない。でも、同時に前を行く加瀬中の背中も近づいている。競技場まで続く坂はあと50メートル。加瀬中、おれ、幾多西中。三人の中の二人しか、ほしい物を手に入れられない。

「絶対できる」「あと少し、力出し切れ」そんなただの励ましでも、俊介はいつも真剣に聞いてくれた。[1]俊介のまっすぐな思いが、時々痛くて苦しかった。俊介が思い描くおれでいられないことが、やるせなかった。だけど、俊介がいたからこそ、おれは投げ出さずに済んだんだ。俊介がおれを見ていてくれたから、腐りきらずに済んだんだ。今日は本当に信用してもらえる先輩でいたい。おれは［A］を食いしばって最後の坂を上りきり、（　a　）位のまま競技場へと入った。

競技場に入ったとたん、応援の声が大きくなった。【　I　】どこの学校の生徒たちも顧問の先生も張り裂けるように叫んでいる。[2]それに合わせるかのように加瀬中がスパートをかけた。

加瀬中の生徒はここにきてまだ振り絞れる力が残っている。3キロ近くを走ってきたのに、*1フォームも崩れていないし、足にも力がある。さすが満田先生が顧問をしている学校だ。

おれは加瀬中から離れないようにくらいついた。加瀬中はどんど

んスピードを増す。けれど、ひるんじゃだめだ。一瞬でも気を抜いちゃだめだ。ついていくんだ。ところが、残り300メートルとなったところで、加瀬中を見据えて走っているおれの横に、幾多西中の肩が並んだ。

「桝井君、がんばって」

やばい。はっとしたおれの耳に上原の声が飛びこんできた。いつもと同じように「がんばって」と「あと少し」を繰り返している。

【 Ⅱ 】教師が泣いていいのは、卒業式だけだって言ったのに。

おれがアンカーを走ることに決定したのは、今日の朝だ。

「そうそう、エントリー変更したんだ」

競技場につくと、上原が突然言い出した。【 Ⅲ 】

「やっぱり桝井君を6区にした」

「どうして」と目を丸くするおれに、上原は「勝ちたいから」とあっさり言った。大会当日の朝、直前の変更だ。それなのに、衝撃を受けているのはおれだけのようで、[3]みんなはすんなりと納得して、次の作業にかかっていた。

「おれ、貧血なんだ」

おれはテントを立て始めるみんなから離れて、上原に告げた。貧血という言葉を自分では使いたくなかったけど、上原に早く事情を理解して対応してもらわないといけない。

「そう言えばそんな感じだね」

「そんな感じだねってわかってる？　ほら、[*2]インターバルしたって三本目あたりから足が上がってないし、いつも1キロあたりから速度が落ちてるだろう」

きっと上原は事態の重要さがわかっていない。[4]情でおれを最終走者にしようとしているのだ。でも、勝つためにはそういうドラマはいらない。おれはわかりやすく説明した。

「とにかく最後に力が出ない。一番大事な最後がどうしようもないんだ。最後はどうしたって[*3]競り合いになる。そこで勝てる力がない」

「で？」

上原は［B］をかしげて見せた。

「でって、おれには6区を務める力がないってこと」

「だから何なの？」

「だから何って、ちゃんとチームのこと考えてよ。ここまでやってきたんだ。おれは6区じゃなくてもいい。みんなで県大会に行くことが大事なんだ。おれが恰好つけるためにすべてを台無しにするわけにはいかない」

「なるほどね。桝井君、さわやかでかっこいいと思うよ」

上原は黙って聞いていたかと思うと、何の[5]脈絡もないことを言

い出した。【 Ⅳ 】

「なんだよそれ」

「桝井君さ、自分の深さ三センチのところで勝負してるんだよ。だから、さわやかに見える。それだけしか開放しないで、生きていけるわけないのにね」

「それが駅伝と何の関係があるんだよ」

もうすぐ本番だというのに、どうして上原はこんなことを話しているんだ。あまりに無関係な話に、おれはいらいらした。

「駅伝も一緒だよ。桝井君はチームのみんなに慕われてるし、桝井君もみんなのことちゃんと*4把握してる。みんなの走りも性格も状態もきちんとつかんでる。だけどさ」

上原はおれの顔をじっと見た。

「だけど、桝井君は誰のこともわかってない。[6]誰も桝井君に伝えられないんだよ。みんな一 C 置いてるからね。桝井君、本当にみんなに一 C 置かれちゃってるんだよ」

「だから何なんだよ」

走る直前に、上原はどうしてこんなことを言っているのだ。おれは完全に[7]うろたえていた。

「中学校のスポーツは技術以上に学ぶものがあるっていうの、今までぴんと来なかった。だけど、今はわかるんだ。桝井君がいろいろ見せてくれたからだよ」

上原はおれに微笑んだ。

「走れなくてもいい。私が、ううん、[8]私たちが望んでるのはそんなことじゃないから。でも、6区を走るのは桝井君だよ」

*5トラックは残り半分。幾多西中はおれと肩を並べたままついてくる。こいつに譲るわけにはいかない。もちろん、満田先生が顧問だからって、すぐ目の前にいる加瀬中にも渡せない。負けちゃいけない。最後までジローみたいに楽しむんだ。頭の中では渡部が吹く*6カヴァレリア何とかが響いている。

残り100メートル。酸素はどこにも回っていない。足も腕も身体中が痛い。心臓も*7尋常じゃなく高鳴っている。おれの肩にある*8襷は重い。設楽から大田へ、大田からジローへ、ジローから渡部へ、渡部から俊介へ。そしておれへと繋がれた襷。走っている時は一人だ。でも、おれを進ませているのは、おれだけじゃない。おれは設楽みたいに死にもの狂いで走った。大田のようにすべてをむき出しにしてくらいついた。

ゴールは目の前。（ b ）して。俊介に伝えた言葉を唱えてみる。俊介がずっと見ていてくれた勢いのあるおれの走り。その走りをするんだ。ちぎれそうな身体だって、おれの走りをするんだ。お

れは身体をとにかく前へ前へと押し出した。一歩分、たった一歩分、幾多西中よりおれは前に飛び出た。

いける。このまま走りきるんだ。今日で終わりにはしない。アンカーは最終走者なんかじゃない。絶対に繋いでみせる。おれをみんなを次の場所へと。

〜　中略　〜

「そうそう、県大会のコース。今年から笹岡でしょ？　こないだ見てきたんだ。うちのチームに向いてるコースだよね。上りも下りもふんだん*9にあるし」

上原はもう県大会の話をしている。おれの心配なんかしてやしない。おれは思わず笑ってしまった。

「先生、やる気が出たんだね」

「さあ、それは自信ないけど。でも、まだもう少しこういうことができるっていうのはいいかな」

県大会まで一ヶ月。息苦しさをまだ味わわないといけない。だけど、あと一ヶ月。またみんなと［D］を焦がすことができる。

「それより集合しないと。みんなも戻ってくるころだし」

おれがゴールして三十分は経っただろうか。みんな競技場へ帰ってきているはずだ。走り終えたみんなの顔を早く見たい。

「そっか。そうだね」

「さあ、行きましょう」

おれは肩に下げたままの襷を握りしめて、テントの外へと踏み出した。

（瀬尾まいこ「あと少し、もう少し」より。ただし一部改変があります。）

＊1　フォーム……姿勢。
＊2　インターバル……陸上の練習メニューの一つ。速く走ることとゆっくり走ることをくり返す。
＊3　競り合い……同じくらいの力同士が互いに負けまいと激しく争うこと。
＊4　把握……理解。
＊5　トラック……競走路。
＊6　カヴァレリア何とか……楽曲名。吹奏楽部の渡部がこの曲をよくサックスで練習していた。
＊7　尋常じゃなく……異常に。
＊8　襷……肩から腰に斜めにかける帯。バトンのように繋いでいく。
＊9　ふんだんに……たくさん。

問一　――1「俊介のまっすぐな思いが、時々痛くて苦しかった」とありますが、それはなぜですか。その理由にあたる箇所を「～から。」に続くかたちで、文章中から十五字以上二十字以内でぬき出しなさい。

問二　A ～ D にあてはまる語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア、胸　イ、目　ウ、手
エ、歯　オ、首　カ、口

問三　（　a　）にあてはまる数字を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア、二　イ、四　ウ、六　エ、八

問四　「ただ、上原の声はいつもと違って震えている。」は文章中のどの箇所に入りますか。【　Ⅰ　】～【　Ⅳ　】の中から選び、記号で答えなさい。

問五　――2「それ」が指しているものを文章中から三字以上五字以内でぬき出しなさい。

問六　――3「みんなはすんなりと納得して、次の作業にかかっていた」とありますが、それはなぜですか。次の中から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア、みんなにはすでに上原先生から伝えてあったから。
イ、早く気持ちをきりかえて次の準備をしないと間に合わないから。
ウ、そのエントリー変更が一番いいと思ったから。
エ、いろいろ言ったとしても上原先生の決定はもう変えられないから。

問七　――4「情」の意味として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア、情報　イ、感情　ウ、情景　エ、表情

問八　――5「脈絡」とはどのような意味ですか。文章中から二字でぬき出して答えなさい。

問九　――6「誰も桝井君に伝えられないんだよ」とありますが、これは何を伝えられないということですか。「～ということ。」に続くかたちで、文章中の言葉を使って十字以上十五字以内で答えなさい。

問十　――7「うろたえていた」の意味としてふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア、息苦しくなっていた　　イ、動揺（どうよう）していた

ウ、泣きそうになっていた　　エ、自信をなくしていた

問十一　――8「私たちが望んでるのはそんなことじゃない」とありますが、逆にここで望んでいるのはどのようなことですか。次の中から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア、桝井君がさわやかな走りでチームを県大会に導くこと

イ、桝井君が最後に競り合ってライバルに勝つこと

ウ、桝井君が5区を完璧（かんぺき）に走りぬくこと

エ、桝井君がこれまでの思いをすべてぶつけて走ること

問十二　（　b　）にあてはまる最もふさわしい語を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア、信用　　イ、挑戦（ちょうせん）　　ウ、協力　　エ、競走

問十三　――9「アンカーは最終走者なんかじゃない」と言っているのはなぜですか。次の（　　）の中にあてはまる語句を文章中から十字以上十五字以内でぬき出して答えなさい。

アンカーは（　　）繋ぐ者だから。

問十四　――10「走り終えたみんなの顔を早く見たい」という思いが表れている行動が描（えが）かれている一文を文章中からぬき出し、その最初の五字を答えなさい。

七

「継続（けいぞく）は力なり」（続けることで力がつく、小さなことでも続けて行えば成果が出る）という「ことわざ」があります。自分のこれまでの生活をふり返り、この「ことわざ」にあてはまる経験を具体的に百五十字以内でまとめて書きなさい（句読点や記号も一字と数えること）。